

# 「御布施」にはどのような意味が？

● 質問 ● 葬儀や法事の時に「住職に渡す金封に「御布施」と書きますが、この「布施」にはどのような意味があるのでしょうか？

## □ 布施という言葉

「布施」の「布」は、もともと「ぬの」の意味ですが、「ぬの」は敷き広げられるものです。転じて、「布」は「ゆきわたらせる」「ほどこす」という意味を持つようになります。つまり「布施」は、「布」も「施」もほどこすという意味なのです。

「布施」の原語は、インドの「ダーナ」という言葉です。「ダーナ」は「与えること」という意味ですので、漢訳は元の意味を忠実に翻訳していると言えます。

## □ 布施の歴史

さて、インドには、お釈迦さまが仏教をひらかれる以前から、出家修行者に対して食べ物などを施す習慣がありました。たとえば、修行者であったお釈迦さまは、厳しい苦行をやめた後、近くの村の娘スジャータさんから乳粥を施与されたと伝えられています。お釈迦さまはこの乳粥によって体力を回復され、菩提樹の下で瞑想に入り、さとりをひらかれます。このスジャータさんの乳粥を施すという行為が、まさしく「布施」であります。

## □ 布施の目的

それでは、なぜ出家者に対して布施が行われるのでしょうか。元来インドでは、功德を積んだ出家者に対して布施を行うことで、功德

が分与されると考えられていました。布施によって功德の恩恵にあずかり、その結果、天に生れることができると考えられていたのです。

また、布施を頂戴する出家者が布施をなした者に対して教えを説くという習慣もあつたようです。

このような、出家者が教えを伝え、それを在家者が喜ぶという関係があつたことも、出家者を布施という形で支えるインド社会の形成に寄与したと考えられます。

## □ 仏教の布施の分類

仏教では、布施を財施と法施の二種類に分類するようになります。また、この二種類に人々から恐れを取り除く無畏施を加えて三種類に分類することもあります（一五三頁）。

財施とは文字通り食べ物などの生活の資財を布施す

ることです。法施とは、出家者が在家者に教えを説くことです。先にも述べたように、インドには教えを説くという習慣が、古くから根付いていました。それが布施の一つに分類されるようになるのです。

このように、教えの伝達を布施とするようになることも、仏教における布施の重要な特徴と言えます。

## □ 無財の七施

法施の例からもわかるように、布施の意味は財物の授受だけに限られません。「雑宝藏経」には有名な「無財の七施」が説かれます。七施は、眼施・和眼悦色施・言辞施・身施・心施・床座施・房舎施の七つです。それぞれ、やさしいまなざしで接すること、しかめつらをせず、良い表情で対応すること、優しい言葉かけること、きちんと挨拶すること、心を込めて

ふるまうこと、すわる場所を設けること、部屋を使つてもらうことを意味しています。

また、「優婆塞戒経」には、暑いときには扇ぎ、着物で陰を作り、寒いときには火をたいてやり、また着物があたためてやり、盲目の人がいれば手を取り杖を取って導く、といった布施の方法も示されています。

## □ 布施のころ

「無財の七施」や「優婆塞戒経」にも見受けられるように、布施は、心のありようとも深く関係しています。たとえば、見返りを期待して布施を行ったり、何らかの行為の返礼と考えて布施をしてはならないとされます。布施は貪りのない気持ちでなされることによって、行為に価値が生れるのです。ですから、「読経料」「御経料」といった表現は、読経の代金を意味しているよ

うに受け取られるので、「御布施」を包む時には、ふさわしくないと言えます。

## □ 布施波羅蜜

大乘仏教の基本的な行法に、六波羅蜜があります。この中に、布施は「布施波羅蜜」として組み込まれます。布施波羅蜜とは「極限まで布施をなすこと」を意味していますので、決して容易な修行法ではありません。

具体的には、六波羅蜜の修行は般若波羅蜜を基調としており、たとえば「金剛般若経」は、布施を行う時には、布施をなす者、受け取る者、施される物の三つを空と見なくてはならないと厳しく戒めま

す。つまり、諸存在が固定的な実体をもたないこと、即ち空であるという智慧に基づいて、行じなければならぬのです。そして、空であると知ることによつ

て、執着が完全に断たれ、布施波羅蜜は、行として成立するのである。このように、布施波羅蜜は、行ずる主体の内面——心のありよう——が重視される行なのです。

## □ 浄土真宗の布施

仏教における布施の意味を振り返りながら、浄土真宗の布施について考えてみましょう。元来布施は、天に生れるという基本的な目的を持つ一方で、教えを伝え、それを喜ぶ心と関係して

いました。また、仏教では教えを伝えることも布施の一つとされるようになり

ます。更に布施は、それを行う心が重視されます。その行者の内面が重視され、厳格な修行となつたのが大乘仏教における布施波羅蜜です。

このように布施は、長い歴史の中で変化してきました。

さて、浄土真宗における布施ですが、「唯信鈔」に、布施による往生は、自力諸行の往生と規定されています（二二二―二三八頁）。このことから確認できるように、布施波羅蜜は私たち凡夫の成し遂げられない行業であり、浄土真宗が、布施によってさとりを目指していることは言うまでもありません。布施の歴史の中で考えるならば、やはり、教えが伝わり、その教えを喜ぶという伝統を受け継いだものが浄土真宗の布施と言えるでしょう。

身近な方の死をご縁として阿弥陀如来の救いに出会い、その出遇えた喜びを分かち合いたいという思いが、浄土真宗の「布施」という言葉の中に結実している、受けとめることができようかと思えます。

（教学伝道研究センター常任研究員 藤丸智雄）